

“Talk about harm, not risk” ——リスクでなく、害について議論しよう

2月21日、Andrew Herxheimer氏が90歳の生涯を閉じた。1962年に英国で、製薬企業から援助を受けない医薬品情報誌Drug and Therapeutic Bulletin (DTB)を発刊した、独立医薬品情報誌の創始者であり、本誌が加盟する国際医薬品情報誌協会 (ISDB)の創設と普及に大きな足跡を残した。その理念は、“information for rational use of medicines”「医薬品に関する適切な情報」である。現在のevidence based medicineに通じる考え方だ。コクラン共同計画において、企業からの独立を保つための条件に関する論議で意見をまとめる役割を担い、害についてもコクラン共同計画のオピニオンリーダーであった。

薬剤の利益と害に関する議論で、最も印象に残っている彼の言葉は、“Talk about harm, not risk”「リスクでなく、害について議論しよう」という言葉である。「害」という意味で「リスク」という言葉が使われることが非常に多い。これが曖昧さや混乱を招いている。薬剤による害については、以下の側面を考えておく必要があるという。

1. 害の性質、すなわち症状、重症度、時間的経過（発症、期間、可逆性）
2. 害の頻度（リスク）
3. 発症する人にとっての重大性
4. 発症を予知し、減じ、予防する手段の有無、利益を最大にする方法

「リスク」は「害」の一側面にすぎない。ISDBのマニュアルづくりに、上記の氏の考え方が、大きく反映された。

彼は、ユーモアの人でもあった。20年以上前、日本でISDBの集まりがあった時、カラ

オケの話になり、「カラ」は英語で「empty」を意味すると言ったら、彼は自分のツルツル頭を指さして“What do you call this in Japanese?”「あたま」と答えると、頭を指さしたまま「Kara-atama」と言い、いたずらっぽく「にんまり」した。

医学界に大きな功績を残し、まだまだ頭脳明晰で現役で仕事もし、慕われての急逝は、ある意味理想の旅立ちでもある。

ご冥福をお祈りします。

さて、今号で取り上げた新薬「デュタステリド」に関しては、根本的な疑問がぬぐいきれない。検討してみて、その疑問はさらに深まった。添付文書の記載にそって本誌でも「脱毛症」としたが、脱毛は「症」なのか？治療が必要な症状、疾患なのか？

43歳で自殺した田宮二郎氏は薄毛に悩み、毎年英国で植毛術を受け、その合併症の激しい片頭痛や記憶障害に悩んでいたという。その当時、別の男優がカツラの宣伝に出演した途端に仕事がなくなったともいう。しかし現在では、育毛剤やカツラの宣伝に出演したために仕事が減ったという話は聞かない。男性型脱毛は男性機能が高いことの証明でもある。

男性機能の喪失や認知障害、うつ、自殺の害、悪性度の高い前立腺がんといった害が許容されるほど、脱毛（薄毛）は重大な「病気」であろうか。「脱毛」に悩む人が正しい判断をし、より重大な害に悩むことのないよう、医師や薬剤師からの適切な情報の提供が必須である。

Herxheimer氏の残した“Talk about harm, not risk”を改めてかみしめたい。